
かゆい

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かゆい

【Nコード】
N8962H

【作者名】
神村律子

【あらすじ】
背中が猛烈にかゆい。でも手が届かない。

かゆい。かゆい。かゆい！ かゆい！

猛烈にかゆい！！

背中の、どうしても指が届かないところ。

うーっ！ ひーっ！ くーっ！

ダメだ。

精一杯頑張ってみたが、どうしても届かない。

柱の角で擦ってみた。

難しい。うまくそこにヒットしない。

とにかく、ピンポイントでかゆいのだ。

あ、今かすめたのに。ダメだ、またずれた。

ますます我慢できなくなる。

何なんだ、このかゆさは？

鏡で見よう。

ゲゲッ、かゆいところ以外が、引つかき過ぎて酷い事になってる

よ。

原因わからないな。鏡で見たのでは無理なのか。

そうだ、相棒に見てもらおう。

それが一番だ。

「なあ、俺の背中、凄くかゆいんだけど、どうなってる？」

相棒はチラッと俺の背中を見て、

「小さい虫に食われてるよ。そのせいだろ」

「ええ？ 虫に食われてるのか？ そいつは大変だ」

「おい、誰か来たぞ」

相棒の声に俺はハッとして明かりを消し、定位置に戻った。

コツコツと足音が近づいて来た。

警備員だ。巡回の時間か？ いつもより早いな。

やばかった。

お、入って来たぞ。いつもは通り過ぎるのに。

「誰もいないよな」

奴は俺達の方に懐中電灯の光を向けた。

でも大丈夫。ばれたりしないさ。

警備員は立ち去りながら、

「いつ見ても理科室の人体模型と骸骨は気味悪いよな」

と俺達の悪口を言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8962h/>

かゆい

2010年10月9日05時01分発行